

田島 A 遺跡

— 第3、4、5、6次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第723集

2002

福岡市教育委員会

Ta Zima
田 島 A 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 723 集



| | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 田島A遺跡 | 3次 | 4次 | 5次 | 6次 |
| 調査番号 | 0010 | 0029 | 0032 | 0044 |
| 遺跡略号 | TZA-3 | TZA-4 | TZA-5 | TZA-6 |

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成12年度に実施した、田島△遺跡第3次、4次、5次、6次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解を賜り、ご協力を頂きましたことに対しまして厚く御礼申し上げます。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

1. 本書は平成12年度に行った田島A遺跡3、4、5、6次の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
3. 遺構実測図のトーンは、断りがない限り焼上の範囲を意味する。
4. 本書に使用した遺構、遺物の実測、製図、写真撮影は各担当者が行ったほか、松末香織(3次製図)の協力を得た。
5. 本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、中原尚美の協力を得た。
6. 本章の執筆、編集は各担当者が行った。
7. 本書に係る図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

第3次

| | | | | | |
|-------|------|-----------------------|--|--------|-------------------|
| 調査番号 | 0010 | 事前審査番号 | | 遺跡略号 | TZA 3 |
| 調査地地籍 | | 城南区田島1丁目393-4 | | 分布地図番号 | 62小笠 |
| 開発面積 | | 172m ² | | 調査面積 | 115m ² |
| 調査期間 | | 2000年5月10日～2001年6月14日 | | 担当者 | 池田祐司 |

第4次

| | | | | | |
|-------|------|----------------------|--|--------|-------------------|
| 調査番号 | 0029 | 事前審査番号 | | 遺跡略号 | TZA-4 |
| 調査地地籍 | | 城南区田島1丁目309-1 | | 分布地図番号 | 62小笠 |
| 開発面積 | | 661.33m ² | | 調査面積 | 140m ² |
| 調査期間 | | 2000年8月4日～2000年8月18日 | | 担当者 | 米倉秀紀 |

第5次

| | | | | | |
|-------|------|-----------------------|--|--------|------------------|
| 調査番号 | 0032 | 事前審査番号 | | 遺跡略号 | TZA-5 |
| 調査地地籍 | | 城南区田島1丁目309-730他 | | 分布地図番号 | 62小笠 |
| 開発面積 | | 111.29m ² | | 調査面積 | 53m ² |
| 調査期間 | | 2000年8月21日～2000年8月25日 | | 担当者 | 米倉秀紀 |

第6次

| | | | | | |
|-------|------|------------------------|--|--------|------------------|
| 調査番号 | 0044 | 事前審査番号 | | 遺跡略号 | TZA-6 |
| 調査地地籍 | | 城南区田島1丁目309-6 | | 分布地図番号 | 62小笠 |
| 開発面積 | | 47.2m ² | | 調査面積 | 70m ² |
| 調査期間 | | 2000年10月5日～2000年10月16日 | | 担当者 | 米倉秀紀 |

目 次

| | | |
|-----|---------------|----|
| I. | 第3次調査 | 1 |
| 1. | はじめに | 1 |
| 1) | 調査に至る経緯 | 1 |
| 2) | 調査の組織 | 1 |
| 2. | 遺跡の立地とこれまでの調査 | 1 |
| 3. | 調査の記録 | 5 |
| 1) | 調査の概要 | 5 |
| 2) | 遺構と遺物 | 6 |
| (1) | 住居跡 | 6 |
| (2) | 掘立柱建物 | 15 |
| (3) | 溝 | 15 |
| (4) | その他の遺構と遺物 | 16 |
| 4. | おわりに | 18 |
| 5. | 表採遺物 | 21 |
| II. | 第4次・第5次・第6次調査 | 29 |
| 1. | 調査の経緯 | 29 |
| 2. | 立地 | 29 |
| 3. | 第4次調査 | 29 |
| 4. | 第5, 6次調査 | 31 |

挿図目次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 第3次調査 | 1 |
| Fig.1 周辺の遺跡(1/50000) | 2 |
| Fig.2 田島A遺跡周辺の地形(1/50000) | 2 |
| Fig.3 調査地点と周辺の調査(1/8000) | 3 |
| Fig.4 調査地点と周辺の遺跡(1/8000) | 3 |
| Fig.5 調査地点の位置(1/600) | 4 |
| Fig.6 田島A遺跡第3次遺構配置図(1/100) | 5 |
| Fig.7 SC01実測図(1/30、60) | 7 |
| Fig.8 SC01出土遺物実測図1(1/3) | 8 |
| Fig.9 SC01出土遺物実測図2(1/1、2、3) | 9 |
| Fig.10 SC02実測図(1/60) | 11 |
| Fig.11 SC02遺物出土状況実測図(1/30) | 11 |
| Fig.12 SC02出土遺物実測図(1/2、3) | 11 |
| Fig.13 SC03実測図(1/60、1/30) | 12 |
| Fig.14 SC03南壁土層実測図(1/60) | 12 |
| Fig.15 SC03出土遺物実測図(1/1、3) | 13 |
| Fig.16 SC04実測図(1/60) | 14 |
| Fig.17 SC04出土遺物実測図1(1/3) | 14 |
| Fig.18 SB24実測図(1/80) | 15 |
| Fig.19 SD05、06出土遺物実測図(1/3) | 16 |
| Fig.20 その他の遺構実測図(1/30) | 17 |
| Fig.21 その他の遺構出土遺物実測図1(1/2、3) | 18 |
| Fig.22 ピット出土遺物実測図(1/2、3) | 19 |
| Fig.23 その他の遺物実測図1(1/1、3) | 19 |
| Fig.24 市内出土の山陰型瓶形上器(1/8) | 20 |
| Fig.25 表探遺物実測図(1/3) | 21 |
| 第4、5、6次調査 | 29 |
| 図1 第4・5・6次調査位置図(1/8000、1/800) | 29 |
| 図2 第4・5・6次調査遺構配置図 | 30 |
| 図3 第4次調査SD01・第5次調査SD01土層断面図(1/40) | 31 |
| 図4 第4・5・6次調査出土遺物実測図(1/3、1/4) | 32 |

I. 第3次調査

1. はじめに

1) 調査に至る経緯

平成12年3月21日川崎敏氏より城南区田島1丁目393-4地内の個人住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である田島A遺跡地内にあたり、平成10年には北側に隣接する道路部分では1次、2次調査が行われ、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物が多数検出されていることから、遺跡の存在が十分予想された。このため埋蔵文化財課は平成12年3月30日に試掘調査を行い、古墳時代を中心とした遺構と遺物を確認した。埋蔵文化財課はこの結果をもとに関係者との協議を重ねた結果、建物の基礎が遺構面に影響を与えることから発掘調査による記録保存を免れないと判断し、国庫補助を受け、平成12年5月10日から同年6月14日まで発掘調査を実施した。

調査の実施にあたっては、地権者の川崎敏氏をはじめ関係者の方々には多大なご理解とご協力を頂いた。ここに記して感謝いたします。

2) 調査の組織

調査委託 川崎 敏

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 埋蔵文化財課 課長 山崎純男

埋蔵文化財課 第1係長 山口譲治

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係 大庭康時 加藤隆也

調査担当 埋蔵文化財課第1係 池田祐司

発掘作業 上野道郎 梅野真澄 栗木和子 辻 節子 松本順子 三谷朗子

2. 遺跡の立地とこれまでの調査

油山から派生する丘陵は博多湾岸まで張り出し、福岡平野と早良平野を2分する。田島遺跡はこの丘陵の西側先端部に位置する。付近は樋井川、七隈川等の開析により平尾丘陵、飯倉丘陵と分断されている(Fig.2)。田島A遺跡は京ノ隈古墳(標高18m)を頂部とする丘陵に位置し、金山(標高54.8m)を頂部とする丘陵との間には鞍部が存在する。これらの丘陵には小さな谷が開析され、いくつもの頂部を造り出して複雑な地形を生み出している。田島A遺跡はその中でも東側の田島の集落から別府にかけての瘦せ尾根状の上に広がり、Aso4噴出物である鳥柄ロームに覆われる。調査地点は丘陵の東側斜面にあたり、そのすぐ東側は樋井川の開析を受けている。標高は約7mを測る。

周辺は戦前の地図では、田島、別府の集落以外にはほとんど家は見あたらず。田、畑地、桑畠、林が緩やかな丘陵上に広がっていたようである(Fig.3)。その後、昭和30年代以降に著しい開発が行われ、隙間なく住宅が建ち並ぶ(Fig.4)。このように、早い時期に開発が行われたため、埋蔵文化財の調査は少なく、遺跡の広がりも不明な点が多い。また、開発により、すでに失われていると考えられていた節があった。このような状況で平成10年に行われた別府香椎線の新設道路建設に伴う発掘調査では、多くの遺構遺物が検出され、予想以上の状態で遺跡が残っていることが明らかになった。周辺は、低い丘陵と浅い谷が盛なり、特に削平が少ない斜面に遺構が良好に残っていると考えられ、その検出が期待される。以下、これまでに行われた周辺の調査について簡単に触れる。



Fig. 1 周辺の遺跡(1 / 50000)

- 1 田島A遺跡
- 2 田島小松浦遺跡
- 3 田島和尚頭遺跡
- 4 京ノ隈古墳
- 5 田島B遺跡
- 6 神松寺遺跡
- 7 洋泉寺遺跡
- 8 カルメル修道院内遺跡
- 9 小笠遺跡
- 10 長尾遺跡
- 11 別府遺跡
- 12 茶山遺跡
- 13 飯倉遺跡群
- 14 原東遺跡
- 15 原遺跡
- 16 西新町遺跡
- 17 藤崎遺跡



Fig. 2 田島A遺跡周辺の地形(1 / 50000) Fig.1と同じ部分

田島A遺跡1、2次調査では弥生前期の貯蔵穴4基、古墳時代初頭の堅穴住居1軒、石蓋土壙墓4基、6世紀後半から7世紀初頭の堅穴住居3軒、溝2条、8世紀後半、12から13世紀の掘柱建物、土坑等を検出している。特に東側斜面に古墳時代以前の造構が多い。今回の3次調査と隣接し、ほぼ同様の時期の造構が確認されている。

田島尾船遺跡は金山から福井川流域の沖積地に向かって北東に張り出した標高7mほどの凸状の丘陵上に位置する。確認された造構は、弥生時代前期の袋状堅穴9基、中期の円形住居5軒、古墳時代前期の堅穴住居4軒、奈良時代の堅穴2基、この他に掘建柱建

物4軒等である。遺物としては、マイクロコア、布日瓦が特筆される。現在の田島B遺跡にあたる。

京の隈古墳は田島A遺跡が存在する丘陵の頂部に位置し、標高31mを測る。前方後方墳で調査時には前方部はすでに削平され失われ、後方辺19mを測る。粘土軋で全長3.92mの割竹形木管を主体部とし、鉄劍1、鍔先1、施1が出土している。4世紀末に位置付けられている。

別府遺跡は田島遺跡とは狭い谷を挟んだ丘陵の北西端に位置し、標高5mを測る。7世紀の堅穴式住居跡1件、弥生時代中期後半の土坑を検出している。

以上が田島A遺跡と同じ丘陵上の調査例である。この他に山島和尚頭、茶山遺跡が知られているが、内容は明らかではない。さらに、周囲に目をやると、南側の金山を頂とする丘陵の桶井川に面した裾部には、順に神松寺遺跡、神松寺御陵古墳、淨泉寺遺跡、カルメル修道院内遺跡といった弥生時代から古墳時代の遺跡が巡る。また、桶井川を源て東側には鴻巣山を頂として福岡城に至る丘陵がある



Fig. 3 調査地点と周辺の調査(1 / 8000)



Fig. 4 調査地点と周辺の遺跡(1 / 8000)

が、遺跡の分布はあまり知られておらず、調査も小笹遺跡で弥生時代中期の溝等が確認された程度である。西側には七隈川を挟んで細長い飯倉丘陵があり、飯倉 A～G 遺跡、千隈遺跡が知られ、弥生時代から古墳時代の集落、墳墓が調査されている。

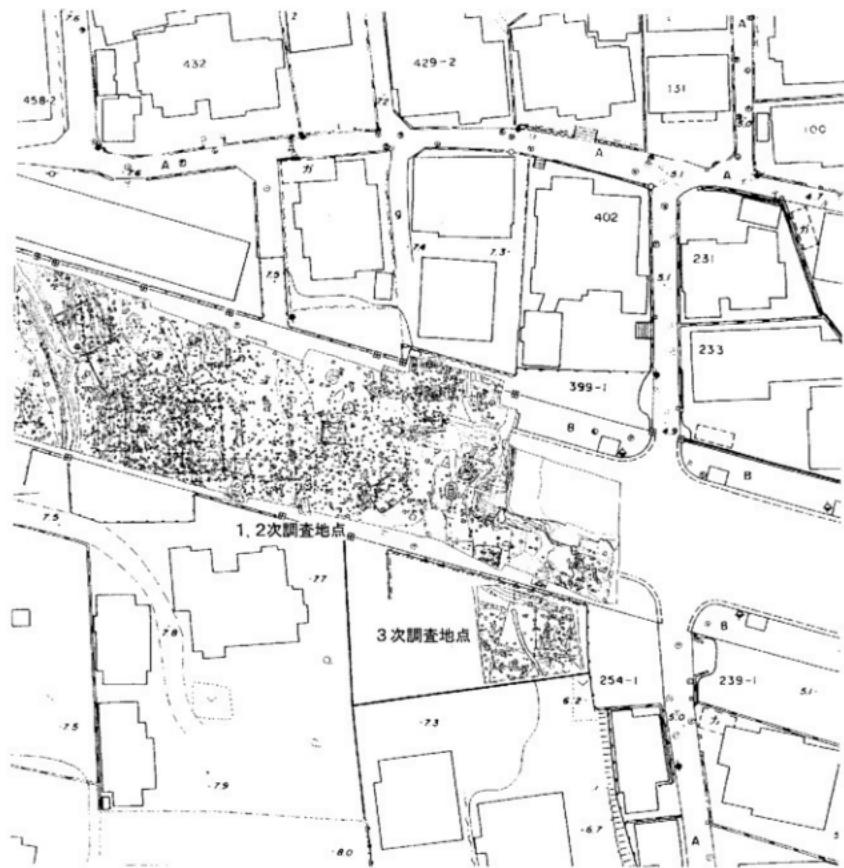


Fig. 5 調査地点の位置(1 / 600)

3. 調査の記録

1) 調査の概要

171.6m²のうち、建物が建設される部分を中心に115m²の調査を行った。遺構は、鳥栖ローム上面で検出した。遺構面は東側に向かって傾斜し、調査区西側で標高6.5m、東側で5.6mで比高差0.9mを測る。検出した遺構は、堅穴式住居跡4軒、上坑、溝、ピットで高い密度の遺構が調査区域全体に広がる。調査区の北側は道路建設時に擁壁が築かれ比高差1mほどである。また、このときの掘削により、調査区北側を東西に走るSD05北側の上端付近から北が削平されている。



Fig. 6 田島A遺跡3次調査遺構配置図(1 / 100)

2) 遺構と遺物

(1) 住居跡

SC01 (Fig. 7~9)

調査区の中央に位置する。平面プランは南北にわずかに長い方形を呈し、 5.6×5 mを測る。深さは西側で50cm、東側で20cmである。覆土は灰褐色粘質土、茶褐色粘質土で均一性が高い。床面は堅くし、マングン紋がみられる。中央部を中心に炭が広がり、中央には径2から3cmの炭が原形をとどめて東西方向に重なって出土した。南側1/3にはよくしまった淡黄色粘質シルトが貼ってある。床面では径25cmまでのビットを検出したが、中央部よりの4本が40から60cmと深く、これが主柱穴と考えられる。壁溝は断続的に確認した。床面は東側が低く高低差が10cmほどある。中央付近にはが状の赤変部が3カ所見られ、炉1から3とした。炉1は 25×20 cmが円形に2cmほど窪み、焼土、炭粒を含んだ灰褐色粘土がたまる。周囲の 35×26 cmの梢円形の範囲の底が厚さ3cmほど赤変する。炉2は 70×45 cm、深さ4cmの梢円形の範囲に炭を含む焼土がたまるが、底は赤変していない。東側の 70×45 cmの梢円形の範囲には、炭が厚さ1から2cmほど広がっている。炉3は北側中央に位置する。 70×60 cmの範囲に焼土が底より上に厚さ最大で7cmほどみられる。北側の窪み状の部分を中心に土器13と器壁が薄く細かな刷毛目調整を施した壺片が出土した。窪み状の中心には10cm大的花崗岩の角礫があり、据えられているようでもあるがはっきりしない。14はこの部分から出土したが、特に2次焼成を受けてはいない。この焼土を除去すると南側にややすれた位置に 60×50 cm、深さ7cmの円形の窪みがあり、焼土粒を含む炭がたまり、底が厚さ1から2cmほど赤変している。上部の焼土と下部の窪みは別のものの可能性もある。

床面直上では遺物が南側に集中して出土した。壺を中心とした土器が黄色土の貼り床より上で出土したが、貼り床の下からも少量出土している。SK12とした壁際の土坑状の掘り込みからは壺15が1個体剥れた状態で出土している。出土した土器は壺の破片が多いが、蛸壺も日立つ。蛸壺は床面で4個が出土し、覆土中の破片を加えると8個体ほどが確認できる。また、滑石製の白玉が出土したため、床面から3、4cmの土を洗浄した。その結果、白玉は小片を入れると23個体が出土した。また、7mm大程までの薄い鉄片が5.3g検出した。

出土遺物のうち1から11は床面直上より出土した。図示した以外に刷毛目調整を施した壺の破片も多い。1から4は梢円形の十器である。1と2はSK12の小片と接合した。外側は細砂粒を少量含む。明橙色で下部に横方向の刷毛目痕が残る。内面は灰褐色でなで調整。小片からの復元のため径、傾きに疑問が残る。3の外側は淡黄褐色で斜方向の刷毛目調整、口縁部は刷毛目の後に横なでを施す。内面は淡橙色でなで調整。1/4からの復元口径14cmを測る。4は7割ほどが残存し、口径13.2cmを測る。外側に刷毛目と思われる擦痕がわずかに見られる。細砂を微量含み、細かな胎土である。橙色を呈す。5から8は蛸壺である。5は完形品でやや淡い橙色を呈す。外側は指頭によると思われる圧痕がわずかに残り、内面は底に指先で搔き取った様な跡が残る他は横方向のものである。焼成前に1cm大的穿孔を1カ所に施す。微細砂粒を含み、胎土は椭円より粗めである。6は上部が3/4程が欠ける。5よりもやくすんだ色調で他はほぼ同様である。7は下部が残る。淡黄色から淡橙色を呈し、内面は斜方向のもので調整を施す。5、6と比べ胎土に質感がなく、器壁が薄く、下部の径がやや大きい。8は底部のみが残存し5、6に近い。9は把手で山陰系の梢円形土器のものと考えている。外側灰褐色、内面淡橙色を呈し、2mm大程までの砂粒を多く含む。器面は荒れている。10は床面で出土した須恵器で壺または壺の口縁部と考えられる。口縁下と頸部に鋭い突帯を持ち、頸部に細かな波状文を施す。11は口縁部の

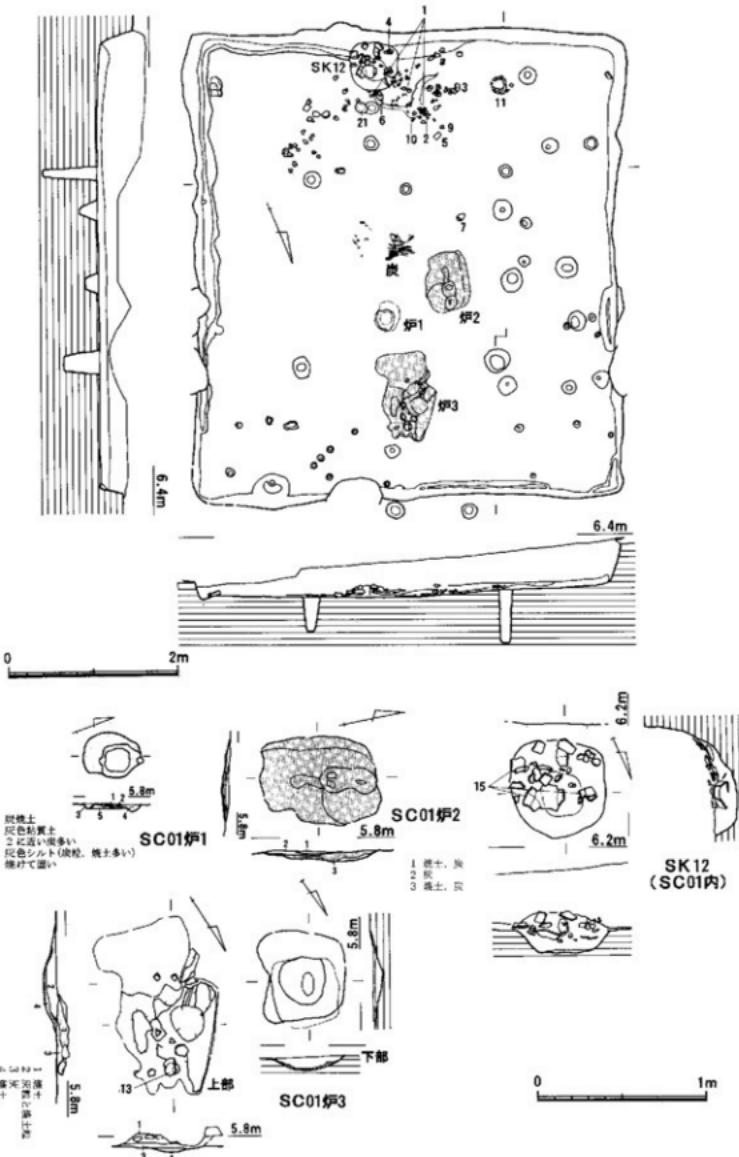


Fig. 7 SC01 実測図 (1 / 60, 30)

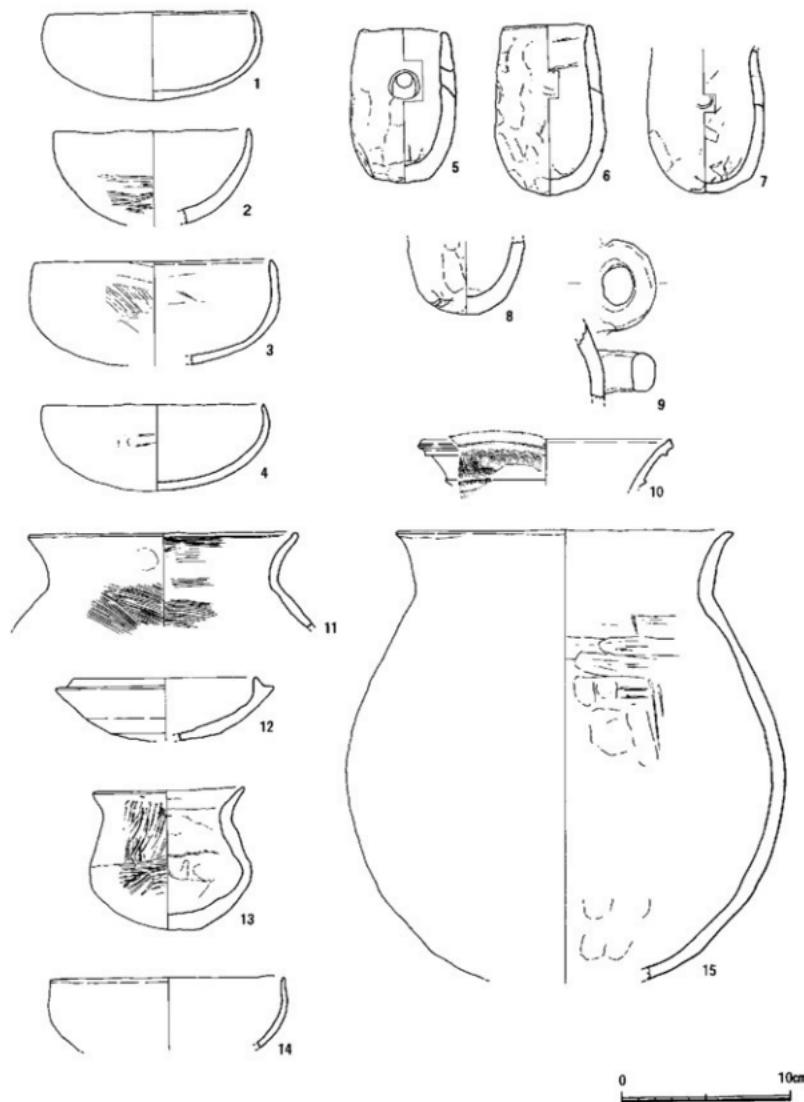


Fig. 8 SC01 出土遺物実測図 1 (1 / 3)

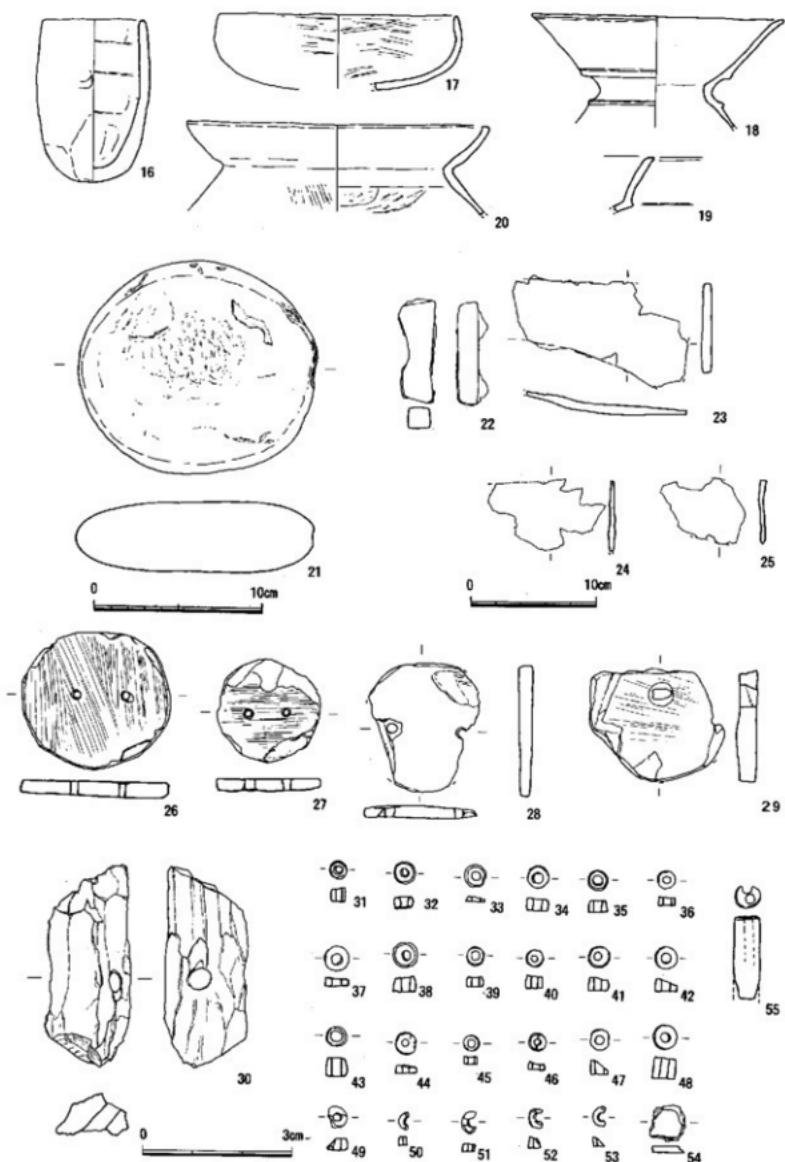


Fig. 9 SC01出土遺物実測図 2 (1/1, 2, 3)

みが倒置された状態で出土した。外面は淡黄色、内面は淡褐色を呈す。内外面とも細かな横方向の刷毛目調整を施し、口縁部は横なでにより消える。口唇部内面には低い段がつく。12、13は炉3からの出土である。12は須恵器の杯で焼きがあまくやや茶色を帯びた淡褐色を呈す。4mm大の砂粒を含む。残存する1/4のうち、大半がSC04上層出土の破片で炉3出土の小片と接合した。炉3はSC01を切るピットにより一部攪乱を受けており、混じり込みの可能性がある。13は炉3の北側で出土した。茶褐色から暗褐色を呈す。外面は全体になで調整で、上半は斜方向の刷毛目調整、下部は横方向の叩きが残る。14、15はSK12からの出土である。14は1/4程が残存する。淡茶色を呈す。調整は不明瞭だが、横方向の調整が見られる。微細砂粒を微量含み、胎土は細かく精良である。15は甕で1/2弱が残存する。SK12出土土器のほとんどを占め、刷毛目が残るが全体になで消される。口縁部は横なでを施す。内面は灰褐色を呈し、横方向の強い削りの後、縱方向に削る。16から20は覆土の上層の出土である。16は蜻蛉で1/3が欠ける。17は1/3からの復元口径14cmを測る。内外面とも横方向の研磨上の調整を施し、炭素の吸着により黒色を呈す。微細砂粒を含むが胎土は精良で、全体に丁寧な作りである。18は山陰系の鼓形器台で小片から復元的に作図した。黄白色を呈す、19は二重口縁の小片である。20は布留式の甕で外面は灰白色、内面は黒色から灰色を呈す。21は玄武岩で全体に磨かれ、磨石、台石として使用されたものか。中央部が若干くぼむようにも見えるが、明瞭ではない。南側の中央部の床面で出土した。22から25は鉄器である。いずれも床面直上で出土した。板状で鎧のため彼面と本来の鎧部が区別しづらい。24と25は同一個体と考えられるが接合しない。26から54は滑石製の玉類である。26から28は2つの孔を穿つ。26、27には表面に擦痕が見られる。29は割れており全形、孔の数は不明である。30は短辺の1方と孔の他は加工を施していない。31から53は白玉で37から53は床直上の土の水洗で検出した。側面が直線的なものと、緩い稜をなして中央部がわずかに膨らむものがある。54はやはり土の水洗により出土した滑石製の小板で特に加工はない。同様のものが他に3点ほど出土し、他に541gの滑石甕が出土している。55は碧玉製の管玉で2つの孔を穿ち、その1つは側面にはみ出し、溝状を呈す。

SC02 (Fig. 10~12)

調査区の西側で茶褐色土で埋まるプランの一角を検出した。方形プランになると考えられるが調査区外に広がるため不明。南北辺4m以上を測る。北側は深さ15cmほどを確認したが、南側は2から3cmと浅い。南側は浅壁の立ち上がりが不明確で、床面の硬化もみられない。北側と一体であるか確信できない。全体も住居跡でない疑いが残る。北側は深さ10から20cmの土坑状の段差、窪みがあり、下部より甕片や炭が出土している。山陰系の壺型土器と甕が床より浮いて、Fig.11のように南に向かつて傾斜した状態で出土した。後世のピットで破壊された部分以外はほぼ完形である。また、北側の蓋付近には床よりやや上で赤変した部分が点在する。西壁の土層では7層の上面にあたり、東側ほど低い。この赤変部は山陰系甕のレベルに近く、関連も考えられる。

出土遺物は少ない。56は山陰系の瓶形土器である。突帯の上には、半環状で横方向の把手を持ち、その延長上の広口部下には、把手の痕跡である径2.5cm程の孔が縱に並ぶ。把手は反対側にもつくが狭口部側は攪乱によって欠く。57は山陰系の二重口縁壺で壺形土器の狭口部側に底部側が接して出土した。全体の1/4が残存する。全体に茶褐色を呈し、2mm大までの砂粒を多く含む。口縁部は内外面に横なで調整を施し、胴部外面は縱方向の刷毛目の後になで、内面は横方向の削り調整を施す。58は56と同一箇所で出土した甕の口縁部で口唇部外面に突帯状の張り出しを有し、内外面に強く横なでを施す。淡茶色から灰褐色を呈し、微細砂粒を含む。59は砂岩製の磨製石器で石劍が近い。造構に作らうものではなく、混じり込みと考えられる。

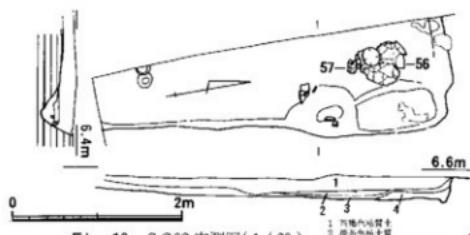


Fig.10 SC02 実測図(1 / 60)

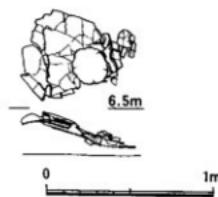


Fig.11 SC02 遺物出土状況実測図(1 / 30)

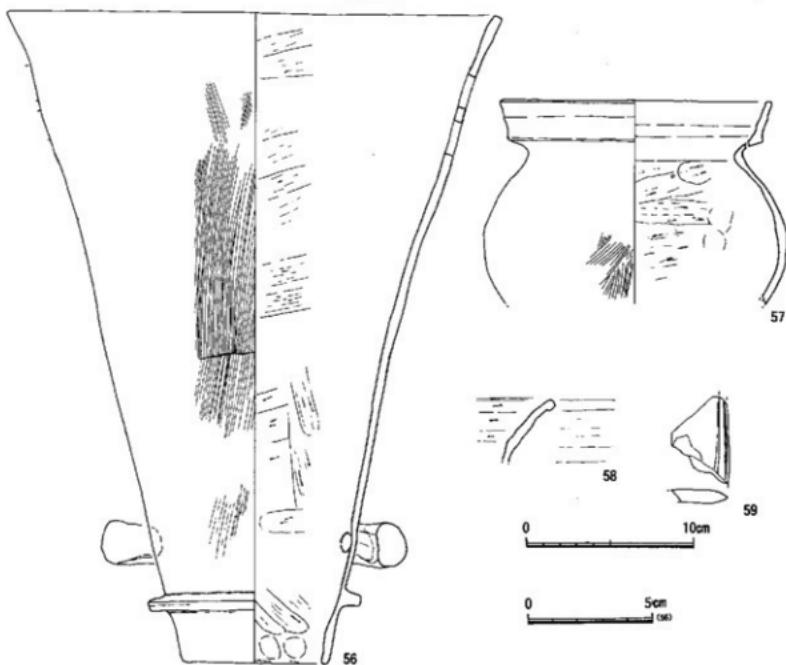


Fig.12 SC02 出土遺物実測図(1 / 3, 4)

SC03 (Fig. 14.15)

調査区の南東で一部を検出した。南北長5.2m、東西4.5m以上を測る、方形プランになると考えられる。深いところで50cmが残る。覆土は暗茶褐色土でSC03を切るピット等の遺構を確認しづらかった。遺構検出面付近のレベルには、後述するSX15, 16, 17の様に遺物がまとまって出土した状態や、焼土の広がりが確認され、検出できていない遺構があるものと考えられる。SC04を切るが、切り合ひも3、40cm下げた時点で確認することができた。このため覆土の遺物の帰属が不明なものが多い。床面には黄色土を主体として黄白色粘質土、灰色土のブロックが混ざる土で厚さ5cmほどの貼り床があり、上

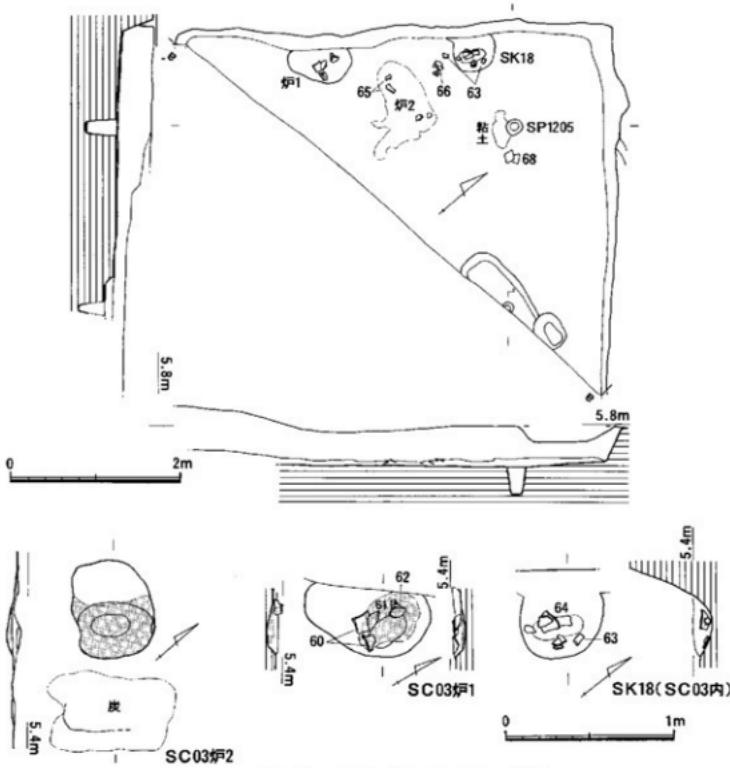


Fig.13 SC03 実測図(1/60, 1/30)

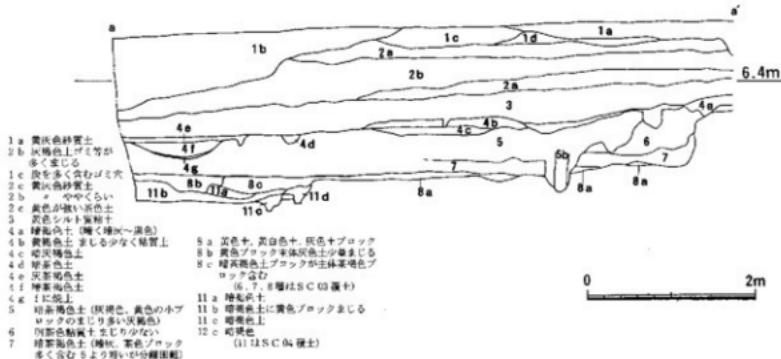


Fig.14 SC03 南壁十層実測図(1 / 60)

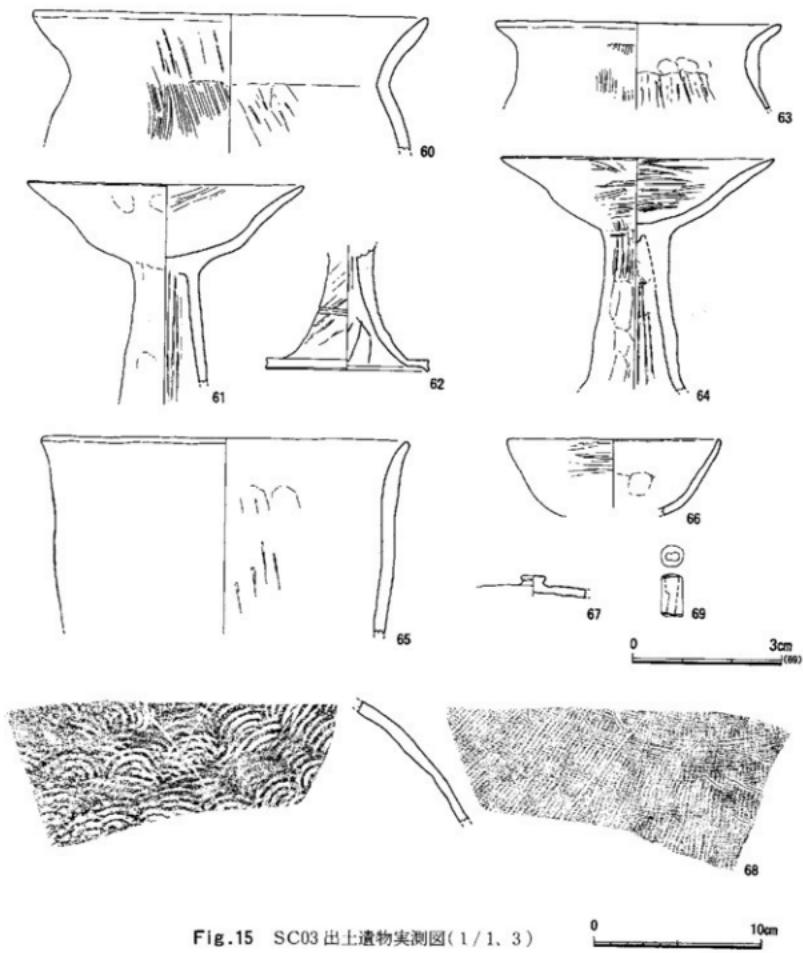


Fig.15 SC03出土遺物実測図(1/1, 3)

0 10cm

面はわずかに硬化し、マンガン分も見られる。また、東側ほど低く、10cmほどの比高差がある。

西側の壁沿いには2つの浅い土坑を検出した。そのうち北側のSK18は平面50×40cmの半円形で、深さ11cmのすり鉢状を呈す。茶褐色土を埋土とし、高坏などが出土した。南側の土坑は平面75×40cmの半長楕円形で深さ7cmを測る。覆土は純土粒と黄褐色土粒の混土で北よりの30×40cmの範囲は床面が焼けている。これを炉1とした。覆土からは高坏、甕等が出土した。西より中央部には径50cmほどの範囲に厚さ2cmの炭が広がり、わずかながら白色粘土がのっている。これを除去するとやや東よりが一部赤変し、西よりの45×30cmは5cmほどのくぼみに炭、下部には焼土がたまり、床面が焼けて赤変していた。炉2とした。この上からは瓶と考えられる土器片が出土している。主柱穴としてはSP1205

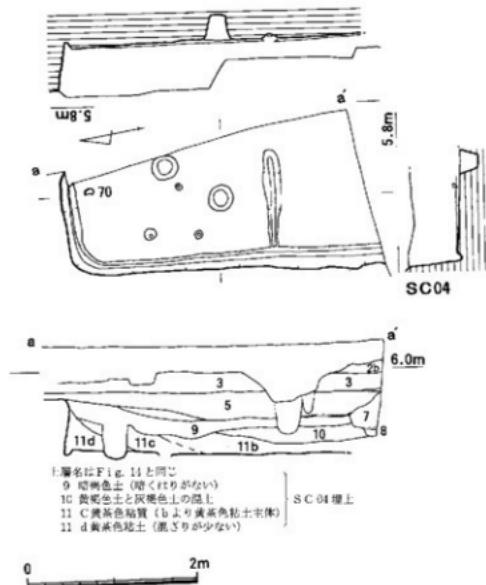


Fig. 16 SC04 実測図 (1 / 60)

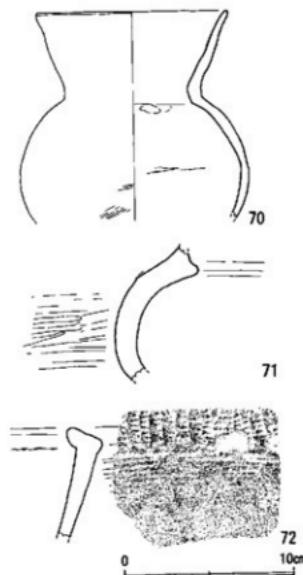


Fig. 17 SC04 出土遺物実測図 1 (1 / 3)

がその一つと考えられるが他は不確定である。調査区の壁沿いにピットがあるが、上面およびSC04床からの掘り込みであり、調査区外にあると考えられる。南東側の壁際には100×35cm、深さ15cmほどの土坑がある。

60から69は床面および土坑出土の遺物である。60から62は炉1から出土した。60は壺の口縁部で小片からの復元である。外面は刷毛調整、内面脇部は削り調整を施す。淡茶褐色から灰褐色を呈し、2mm大までの砂粒を多く含む。61は高壺で壺部は1/4が残存する。器面は荒れている。外面は壺部に指頭圧痕が見られ、内面は壺部に研磨上の調整がわずかに残り、脚部に削り痕が見られる。茶褐色を呈し砂粒を少量含む。62は須恵器の高壺の脚部で暗灰色を呈し、1mm大の砂粒を含む。64はSK18から出土した。63は壺で1/3が残存する。口縁部に横なでを施し、脇部外縁方向の刷毛目、内面は削り調整を施す。外面は茶褐色で、内面は暗褐色を呈し煤ける。2mm大までの砂粒を含み胎土は細かく精良である。64は高壺で壺部は1/4が残存する。壺部の内外面、脚部の外面に研磨調整を施す。茶褐色を呈し、1mm大までの砂粒を含み、胎土は精良である。65から68は床面からの出土である。65は炉2の焼土上で出土した。壺の口縁部から脇部と考えられる。1/8弱からの復元で、外面は灰褐色を呈しながら調整、内面は淡茶色で削り調整を施す。66は壺と考えられる。1/8からの復元で径、傾きとともに疑問が残る。外面に研磨調整が残る。茶色を呈し細砂粒を含む。67は須恵器の蓋である。69は碧玉製の管玉で炉1から出土した。片側からは2つの孔が重なって穿たれ、一つは途中で止まる。長さ8.4mm、径4.7mmを測る。

SC04 (Fig. 16, 17)

SC03に切られ、調査区外に広がる。平面形は方形と考えられ、1辺3.8m以上を測る。深さは北側

で50cmほど残り、南側が深く比高差が10cmほどある。床面には貼り床はなく、やや硬化している。壁際には深さ6、7cmの溝がめぐる。北壁から約2mには西側の壁溝から直行して続く溝が1mほど東に延びている。ピットはいくつか検出したが、主柱穴になるかは不明である。床面、下層の遺物は少ない。北壁際で70が出土した。70は土師質の壺で1/3が残存し、胴部外面に刷毛目が若干残る。淡橙色を呈し、細砂粒を含む。71は覆土下層からの出土で、二重口縁壺の頸部か。内面に研磨状の調整が残る。72は覆土上層からの出土で、口縁部に帯状の内面への突出があり、上面に7mm単位で断続的に櫛描状の施文がある。

(2) 挿立柱建物

多くのピットを検出し、同規模で等間隔に並ぶものはあるが、建物として復元できそうなものは1軒のみである。

SB24 (Fig. 18)

梁行2間×桁行3間以上を復元した。梁行の柱間隔105cm、桁行は120cmを測る。桁行の方向はN-2°-Eである。柱穴は径50cmほどの円形を主とし、底のレベルは5.3~5.6mである。北東隅のSP1167には10×20cm大の礫が傾いた状態で出土した。また、このピットは底の検出を怠っていた。遺物の出土は少ない。SP1040、1162から黒色土器片が出土しており造構の時期に最も近いと考えられる。

(3) 溝

検出した溝状遺構は住居跡等の古墳時代の遺構を切る。その中で東西方向に平行して断続的に走るSD107、08、09、10は、幅40cm、深さ10cmほどで共通し、埋土も淡茶色土で同じであり、一連のものと考えられる。底のレベルは丘陵の傾斜に沿っており畑の溝等の機能が想定されよう。遺物は土師質、須恵質の土器片が出土しているが特定できるようなもの、出土状況はない。この他、南北方向のものや、幅広のものがある。

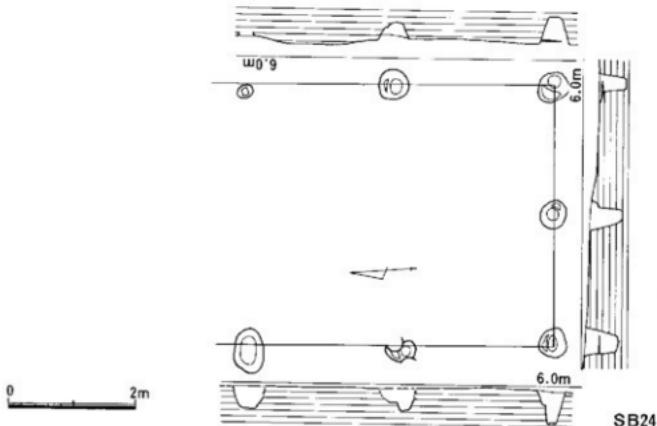


Fig. 18 SB24 実測図(1 / 80)

SD05 (Fig. 6)

わずかに蛇行しながら南南西に近いN-25°-Wの方向に走る。幅50cm、深さ3から6cmで北端と南側の調査区端の比高差は28cmを測る。覆土は暗褐色土で住居跡の覆土に近い。遺物は白磁片の他多数の土師質七器の小片、須恵器片が出土している。73は須恵器で回転なで調整を施す。74は白磁片である。

SD06 (Fig. 6)

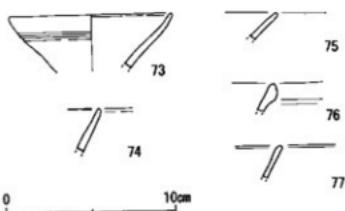


Fig. 19 SD05, 06 出土遺物実測図(1/3)

調査区の北側をほぼ南北方向のN-70°-Wに走るが、西側でやや北に緩やかに曲がる。北側に近接する1次調査区では焼きと考えられる溝状の遺構は検出されていない。断面は浅いU字形を呈し、幅160cm、深さ20から10cmを測る。北側は削平を受けている。また東側に向かって傾斜し、調査区内での底の比高差は63cmを測る。遺物は少ない。75は青磁の皿、76は玉縁口縁の白磁碗IV類、77は白磁碗V類である。他に陶器の壺片、青磁皿、須恵器、瓦器、土器片が出土している。

SX23 (Fig. 6)

調査区南側に1.7mを検出し、調査区外に延びる。幅35cm、深さ10cmを測る。須恵器、土師器片が出土している。

(4) その他の遺構と遺物

特長的な土坑はない。ここでは炉と考えられる焼土SX11、SC03付近で遺構検出面近くで比較的まとまって土器が出土したSX15、16、17、20、21、焼土を伴う甕みSX22、さらに、ピット、遺構に伴わない遺物について述べる。

SX11 (Fig. 20)

S C01の東側で検出した炉状の遺構である。径50cmほどの不整円形の深さ8cmの窪みに炭を多く含む暗褐色土がたまり、床が焼成により赤変する。住居跡の炉に類似しており、窓穴が削平され、底のみが残った可能性もあるが、硬化面、貼り床等は確認できなかった。遺物は出土していない。

SX15, 16, 17 (Fig. 20, 21)

調査区南端で、須恵器を主体とした遺物が、同レベルで比較的まとまった状態で出土した。SX15、16はSC03からSC04にまたがっており、SC03の埋没後のものと考えている。何らかの遺構があった可能性もあるが検出できなかった。

78, 79はSX15出土である。78は土師質の土器の口縁部で、口唇部が須恵器甕の形状を持つ。79は須恵器の坏蓋ではほぼ完形である。ややひずみ、長径11.2cm、短径10.4cmを測る。回転なで調整で仕上げるが、内面は一方向のなで調整である。80はSX16出土の須恵器の坏蓋で2/3が残存する。天井部に3本の線によるへら記号を施す。沈んだ灰色を呈し、胎土にわずかに砂粒を含む。81、82はSX17出土でそれぞれ正置した状態で81を上にして重なって出土した。81は坏身で1/3からの復元である。外面にへら記号が見られる。3mm大の砂粒を含み目立つ。82は坏蓋で天井部が平坦でへら削りを残さない。1/2弱が残る。天井部にへら記号が残る。

SX20, 21 (Fig. 20, 21)

東壁から4m付近で出土した土器群である。SX20の南側には炉状に焼土がかたまるSX22があり関連が考えられる。83から87はSX20の出土である。83から85は甕である。83は外面は刷毛目調整を残し、

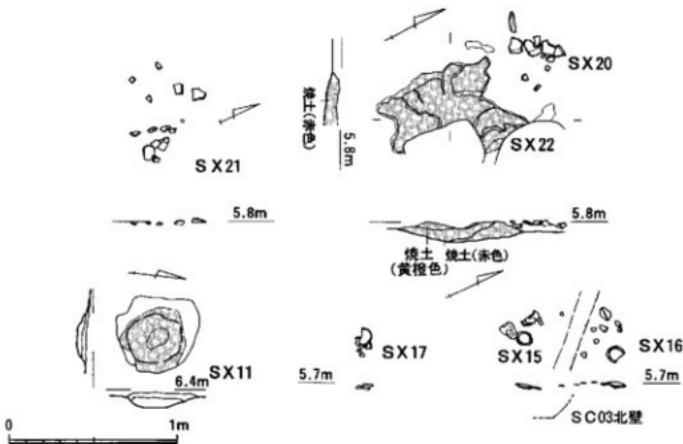


Fig. 20 その他の遺構実測図(1 / 30)

赤みを帯びた茶褐色を呈し、内面は削り調整で暗褐色を呈す。84は口縁部に横なで、胴部内面は削り調整、外面は荒れる。85の外面は桃色を呈す。器面は荒れており調整不明。86は須恵器の坏蓋で焼きがあまく、器面は荒れて調整不明。87は茶褐色のきめ細かな石材で3面に磨った面があり、砾石と考えられる。SX21は須恵器の坏身88が一部欠けるものの、ほぼ完形で倒置された状態で出土した。ひずんでいて長径19.2cm、短径17.7cmを測る。

SX22 (Fig. 20)

SC03の覆土上の50cmの範囲に淡黄橙色、赤色の焼土が深いところで10cmの厚さで広がる。赤色焼土の中央が窪み、炉状でもある。住居等の床の可能性もある。遺物の出土はない。

ピット出土遺物 (Fig. 22)

ピットの多くは住居跡を切る。遺物は土師質の小片が多いが、時期がわかるものでは8世紀から中世初めまでの土師器の坏が目立つ。以下その一部を示した。89から93は土師器の椀である。89は全体が、他は1/2弱が残存し、底部外面には板目压痕が残る。94は黒色上器の椀で1/2が残存し高台が剥げる。外面は黒色で光沢があり研磨調整が顕著に見られる。内面は灰褐色を呈しなで調整である。95から97は土師器の壺の口縁部である。98は須恵器の坏身の口縁部。99は土師器の椀形の土器できめ細かな胎土である。器面が荒れる。100は弥生中期前半の壺の口縁部と考えられる。101は十鍾で長さ4.9cm、幅1.2cm、重量5.69gを測る。

その他の遺物 (Fig. 23)

これまでふれてきた以外に遺構検出時、遺構覆土等から遺物が出土している。土器は弥生時代中期から中世まで、量的には古墳時代後期のものが主体となる。黒曜石も出土しているが少量で定型化した石器はない。後晩期から弥生時代のものと考えられる。以下、それらの遺物の一部を示す。

102から110はSC03覆土の上層からの出土である。102から107は須恵器で、102、103は坏身、104は坏蓋、105は壺の口縁、106は高坏の脚部である。107は壺等の肩部と考えられ、外面に波状文、磨り目、

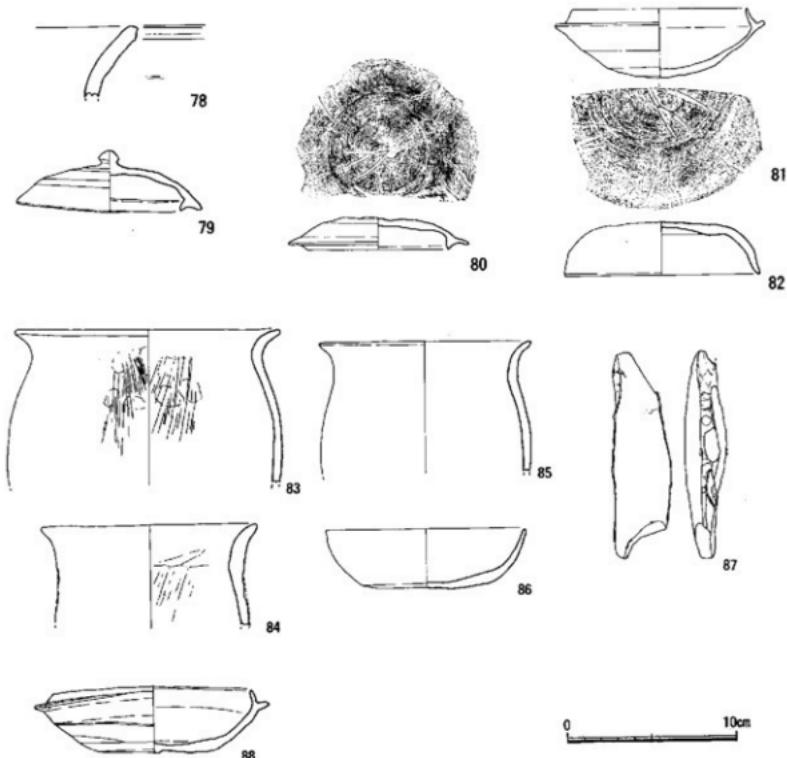


Fig.21 その他の遺構出土遺物実測図1(1/2, 3)

板状工具の木口による押圧痕が密に施される。108は土師器の取手で淡橙色を呈す。109は滑石製の玉で上下端は破面である。110は遺構覆土から出土した滑石製の円盤で、孔が1つ観察されるが2つあるものと考えられる。111は古銅輝石安山岩製の繖で細かな調整剥離で成形し、片面に主剥離面を残す。112は細粒砂岩製の石斧である。

4. おわりに

限られた範囲の調査ではあったが、遺構の密度が高く、遺存状況も良好であった。遺構の時期、種類は1次調査とほぼ同様であるが、近接して検出されている埴輪は確認していない。1次調査の東端で段落ちが確認されているため、遺構の広がりは東側には小範囲であると考えられるが、同様の広がりが田島の丘陵上に広がると考えられる。また、弥生時代中期の遺物も少量であるが出土しており、周辺に遺構の存在を窺わせる。

1. 遺構の時期

ここでは、検出した遺構の時期について振り返っておきたい。確認した遺構は、住居跡、土器集中部、溝、掘立柱建物で、これでほぼ古い順である。住居跡は4軒を確認した。このうちSC02からは布留式古棺に平行すると考えられる山陰系の甕、瓶が出土しており、このなかでは最も古い。次に、S

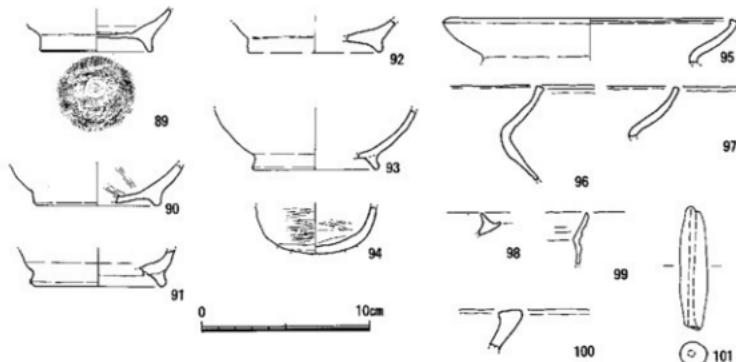


Fig. 22 ピット出土遺物実測図(1/2, 3)

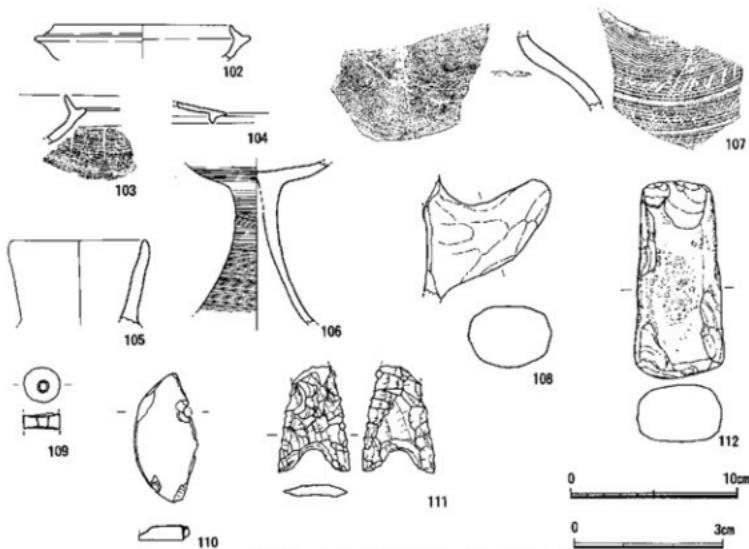
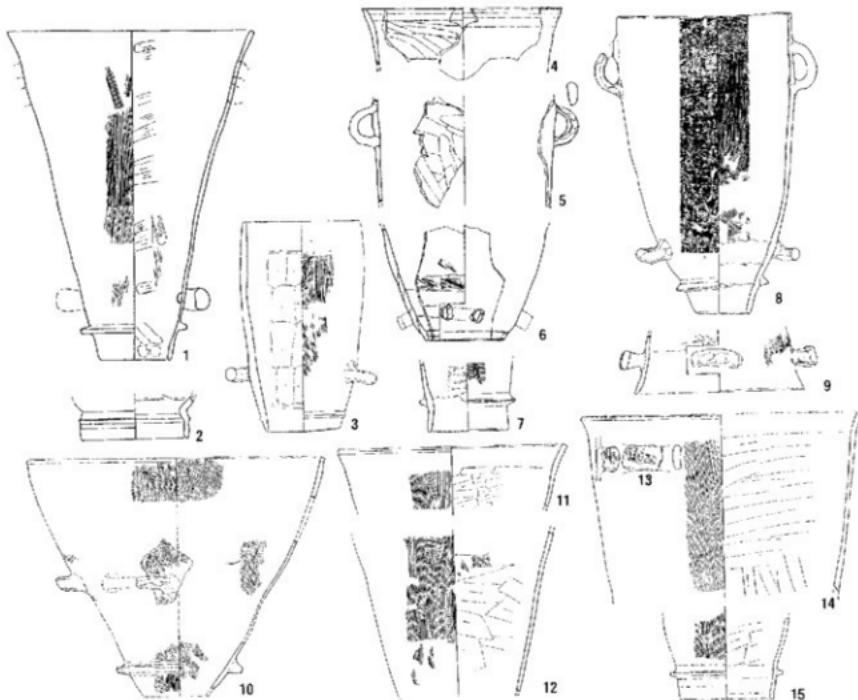


Fig. 23 その他の遺物実測図1(1/1, 3)

C03と04は切り合い関係があり、SC04は時期を決定する遺物に乏しいが、須恵器が出土していること、70の小形長頸壺から5世紀前半頃を考えている。SC03は須恵器62が小田編年のⅢB期で6世紀後半と考えられ、切り合い関係と矛盾しない。SC01は須恵器壺12がIV期だが上面ピットの遺物のまじり込みと考えられ、II期の須恵器壺10や上師器から5世紀後半から6世紀はじめまでのとしておきたい。それぞれの住居跡は同時に存在する事はなく、SC02→SC04→SC01→SC03の順で営まれる。次の時期にあげられるのが、SC03, 04の埋没後に形成された土器の集中部SX15, 16, 17, 20, 21である。そのなかではSX21の88がIV A期で6世紀末から7世紀前半、SX16の80, SX17の81, 82がIV B期で7世紀中頃、SX20がIV期、SX15の79はV期に位置付けらる。これは先に埋没したSC03の時期と矛盾しない。



(1)田島A3次 SC02 (2)那珂77次 SD02 (3)那珂5次 SC01 (4)~(7)古加3次 SB10 (7)有田81次 SK10
 (8)那6次 SC03 (9)~(12)古12次 SB43号住居跡 (10)10号住居跡 (11)包含層 (12)4号住居跡 (13)~(15)2号住居跡

Fig.24 市内出土の山陰型瓶形土器 (1/8)

次にあげられるのはピットおよび、掘建柱建物である。ピットからは弥生時代以降の遺物が出土しており時期幅が想定できる。そのなかでも9、10世紀代の土師器の構が目立つ。掘建柱建物SB24は遺物が少なく黒色土器B類の小片くらいであり時期を決め難いが、10世紀前後と考えられる。SD05に切られることと矛盾しない。溝はいくつかのピットに切られるものの、他の遺構よりも切り合いで新しい。遺物は少ないが、SD05、06から白磁4類、龍泉窯系の青磁が出土しており、中世前半の時期が想定できる。

2. 山陰型瓶形土器

注目される遺物として、SC02で出土した山陰型瓶形土器があげられる。この土器についてはその天地、用途について様々な論が提出され、集成が重ねられている。今回の出土状況は、底とされる狭口部の先に甕の底部側が来る状態で出土し、これが仮に使用法を反映するとするなら、狭口部を上にする器台的なものであるが、推測以上のものではない。この山陰型瓶形土器は、管見に触れたなかで、これまで市内6遺跡での報告がある(Fig.24)。1は今回報告したもので、他にSC01から環状の取手(Fig.8, 9)が出土している。2と3は那珂遺跡のもので出土地点間は80mほどで近接した位置にある。3は古墳時代初頭の住居跡SC04出土で、同じ遺構から環状の取手が2個出土している。4から6は古

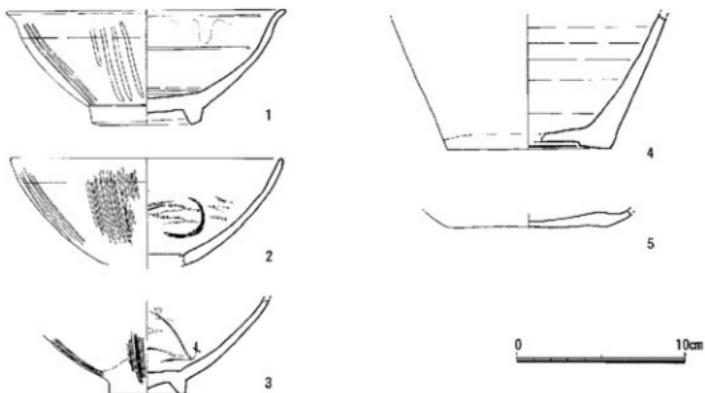


Fig.25 表採遺物実測図(1/3)

塚遺跡1次包含層出土。7は弥生時代終末前後の遺物と一緒に出土した。8は雀居遺跡6次SC03出土、9から15は西新遺跡出土である。各地点とも山陰系の土器が共伴もしくは調査地点内から出土している。今回の調査でも山陰系の壺と共伴し、調査区内で鼓形器台等が出土している。また、1、2次調査でも山陰系の土師器が出土し、同様の遺構が広がる。以上のように市内各所に出土例があり、山陰系の古式土師器が出土している遺跡での出土頻度が高い。同様の他の遺跡にも存在すると思われる。また、破片で認識できていない資料もある。

田島遺跡は早い時期の開発が進んだため、埋蔵文化財の調査が進んでいなかった。近年、1次から3次までの調査を経て、予想以上に遺跡の残りが良く、弥生時代から中世までの遺構が密に広がっていることが確認できた。今後、調査を重ねることで古墳時代の集落をはじめとする遺跡の内容、変遷が、他地域と関わりが明らかになると期待される。

- (1) 今回は次の意見に従った 杉井健 1994「山陰型壺形土器と山陰地方」『古文化叢叢』第33集
- (2) 最近の集成に次の文献がある 長谷川加奈子 2001「山陰型壺形土器」『神女大史学』第18号

5. 表採遺物

Fig.25に示す遺物は、田島A遺跡で表採されたと言う輸入陶磁器である。1次調査の西端付近での表採と聞いているが定かではない。破片が大きく同安窯系の青磁碗がまとまっており、遺構出土のものと考えられる。

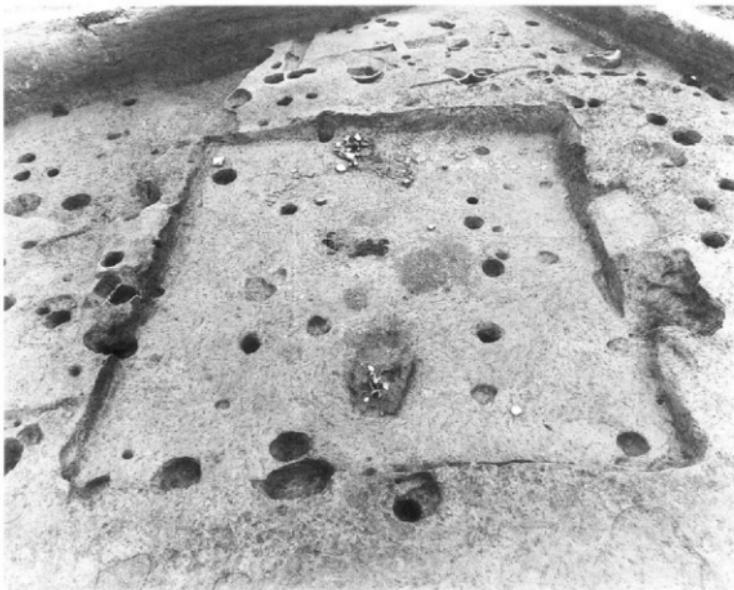
1は青磁で体部上位は1/4の残存である。黄緑を帯びた灰色を呈す。外面には3から5本単位の平行沈線を9条施し、高台部は磨胎である。内面は口縁部と体部中位に1本づつ圈線を施し、見込みは輪状に釉剥ぎを行う。2、3は外面に直線的な櫛描文、内面には櫛描の花文を施す。3は淡い黄緑色を呈し、胎土は黄白色、2は沈んだ緑色で胎土は灰色を呈す。4は陶器の底部で瓶等と思われる。内外面ともに淡い黄緑色の釉を施す。5は土師皿で、内面になで調整が見られるが外目は荒れており不明。砂粒を少量含むが胎土は細かく精良。これらの他に、須恵器片や糸切り底の土師皿片がある。



(1) 上面検出遺構全景（西から）



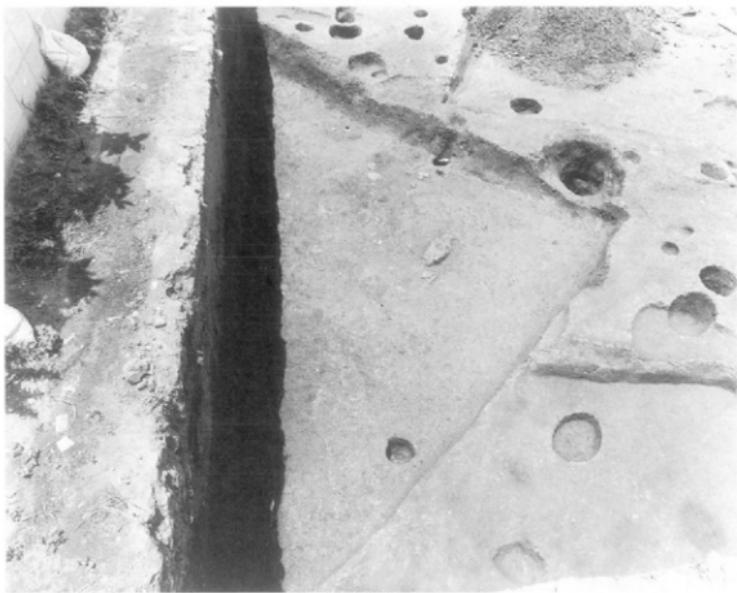
(2) 調査区全景



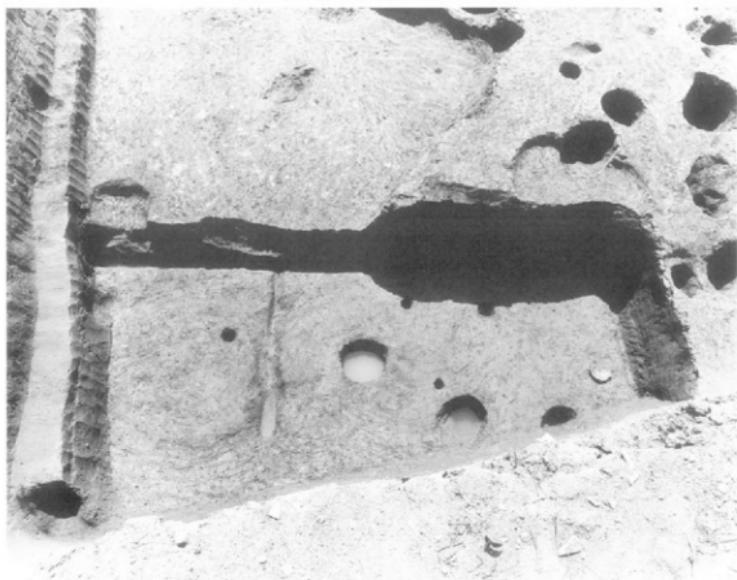
(3) SC01 (北から)



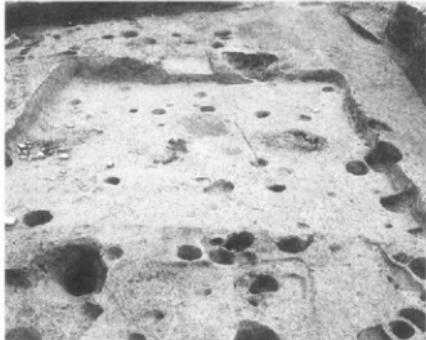
(4) SC02 (東から)



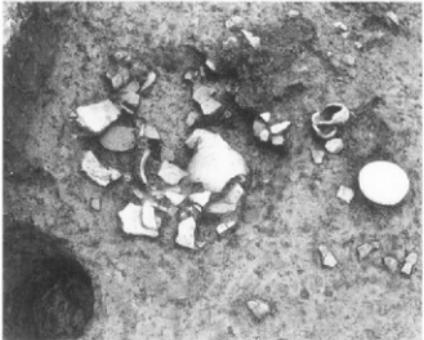
(5) SC03 (東から)



(6) SC04 (東から)



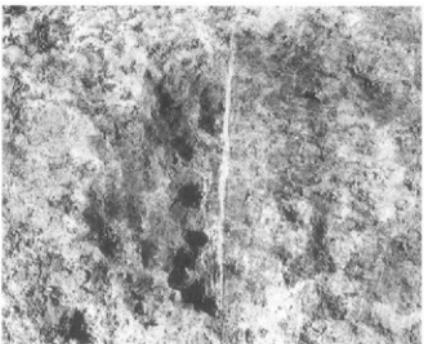
(7) SC01 (東から)



(10) SK12 遺物出土状況 (東から)



(8) SC01 南側遺物出土状況 (北東から)



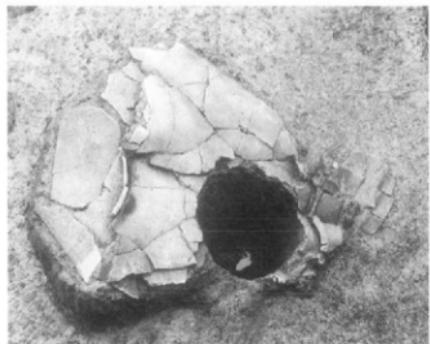
(11) SC01 炉2 (南から)



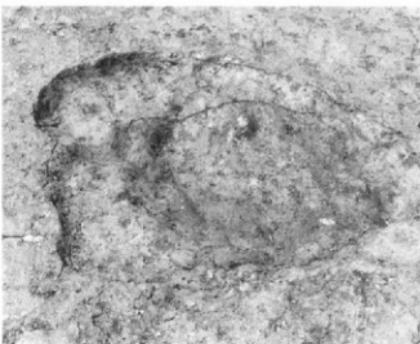
(9) SC01 遺物 11 出土状況 (北から)



(12) SC02 遺物 56 出土状況 (東から)



(13) SC02 遺物 56 出土状況（西から）



(16) SX11（南から）



(14) SC03 西側（東から）



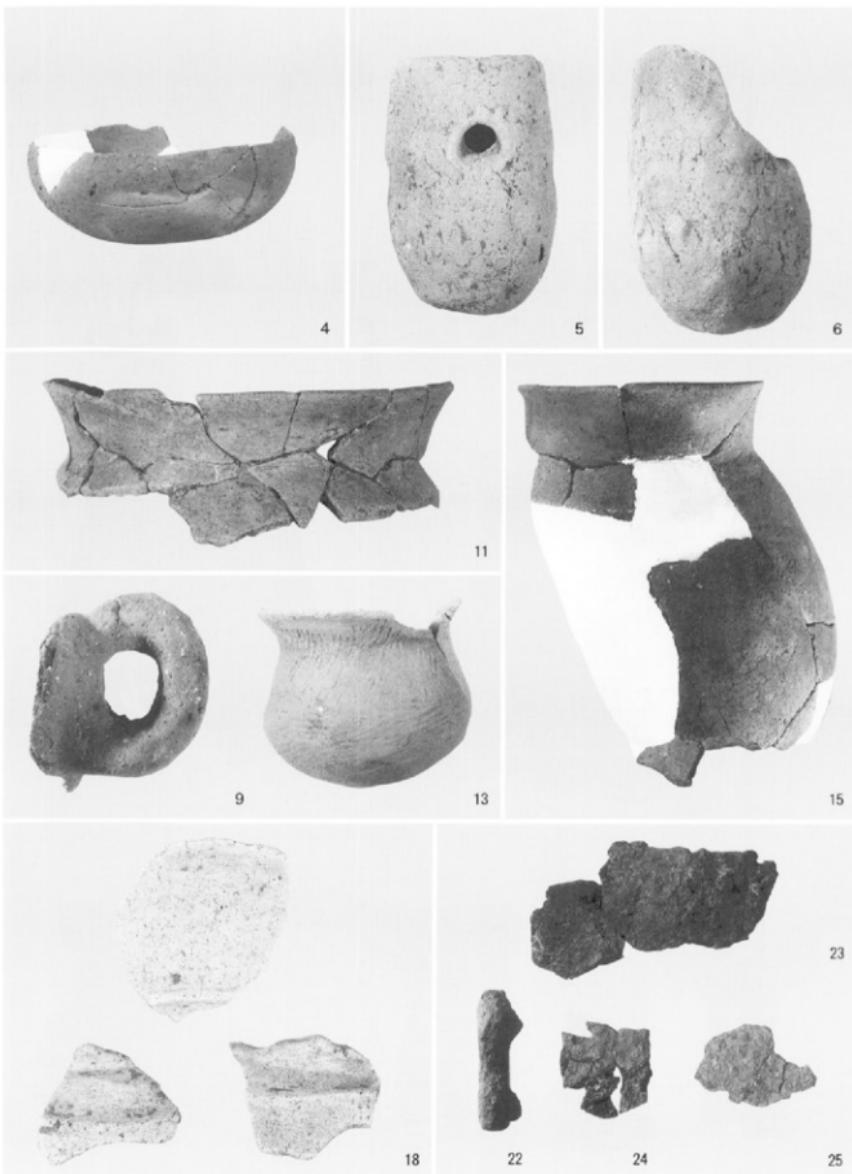
(17) SX15、16（西から）

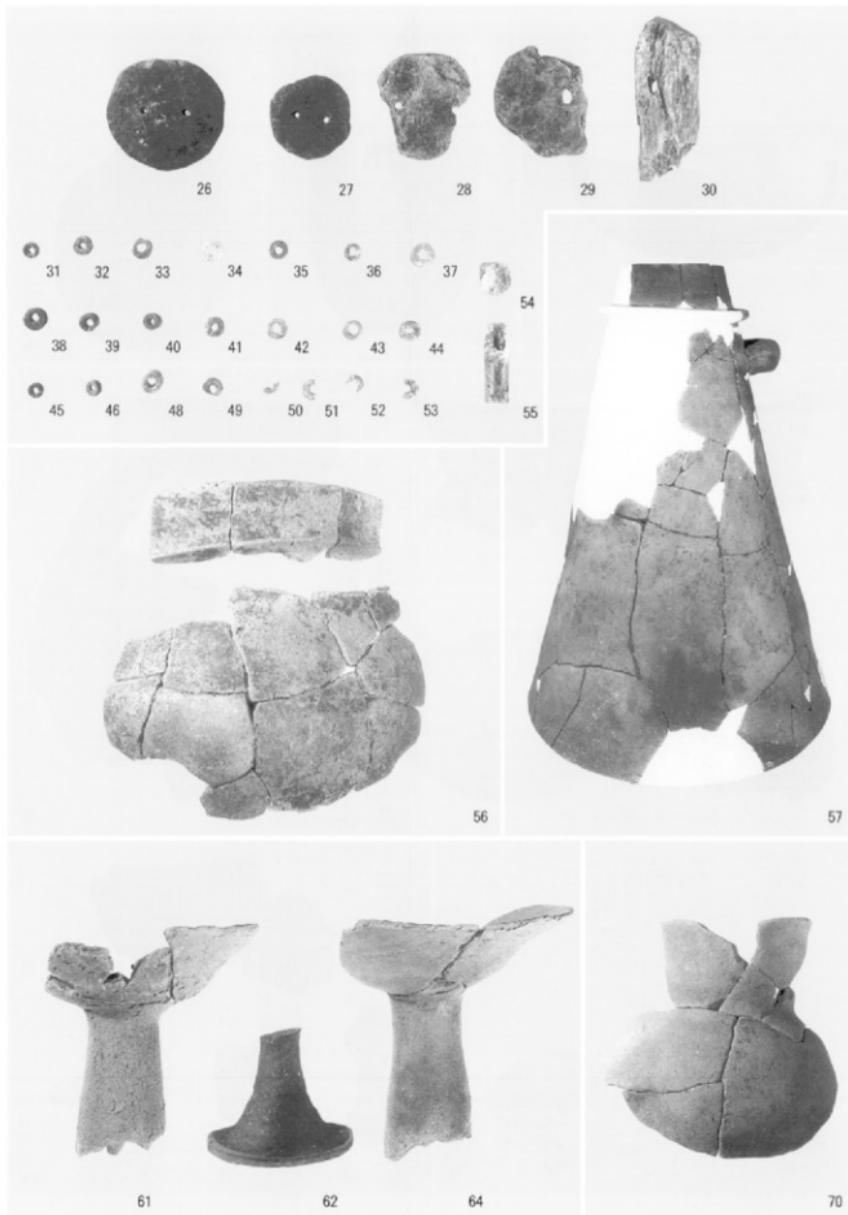


(15) SC03 炉 1（東から）



(18) SD06（西から）





II. 第4次・第5次・第6次調査

1. 調査の経緯

4～6次調査は同一敷地内の同一開発で、宅地分譲とその後の住宅建設である。分譲に伴う進入道路部分と地下げを行った2区画を調査対象としたが、それぞれ地権者(申請者)が異なるため、調査次数は別の番号を振った。

| 次数 | 調査番号 | 所在地 | 申請者 | 調査原因 | 調査月日 | 申請面積 | 調査面積 |
|-----|------|--------|-------|------|-----------|----------------------|-------------------|
| 第4次 | 0029 | 309-1 | 村上正邦 | 専用住宅 | 0804～0818 | 661.33m ² | 140m ² |
| 第5次 | 0032 | 309-7他 | サンライズ | 進入道路 | 0821～0825 | 111.29m ² | 53m ² |
| 第6次 | 0042 | 309-6 | 中村達朗 | 専用住宅 | 1005～1016 | 47.2m ² | 70m ² |

※所在地は城南区田島1丁目以下の番地を記載・調査年は2000年・調査担当は米倉秀和である。

2. 立地

田島A遺跡は早良平野の東端にあり、南から伸びる丘陵上に立地する。調査地点は丘陵の西端近くで、調査区西側には北からの谷に入る。従って、調査区近辺は東及び南に高い緩傾斜地になっている。地山はローム層で表土下10～30cmで検出した。

3. 第4次調査

全般的に削平が著しく、戦前に豚小屋があったためか、攪乱も甚だしい。検出した遺構は大溝(SD01)1本とピット1基のみである。SD01内の外側に浅い小溝が1本走りSD02の番号を振ったが、SD01と同一と判断した。

SD01 調査区南東端で検出した。調査区外側に円弧を描いている。上端幅約4.1m、下端幅約1.1m、深さ約1.2mを測る。埋土は粘質土で自然堆積と思われる。底からわずかに水が湧く。出土遺物は少なく、上層は江戸時代を含み、中・下層では含まない。

出土遺物 いずれも中層・下層の出土。1は白磁碗の底部で、高台径6.6cmを測る。2も白磁の底部で高台径5cmを測る。1・2ともに見込みに焼け膨れが多い。3は瓦質土器の底部で、底径8.2cmを測る。4は瓦質土器の釜で、外面は横ハケ、内面は横のケズリである。口径15.4cmを測る。5は把手。6は平瓦で、凸面は格子目叩きで、凹面にはわずかに布目が確認できる。7は滑石製石鍋である。

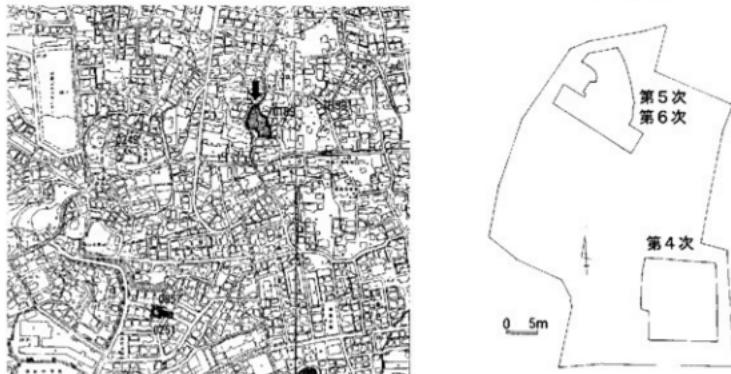


図1 第4・5・6次調査位置図 (1/8000・1/800)



図2 第4・5・6次調査構造配置図

4. 第5・6次調査

隣接する調査区で、同様の遺構が検出されているため、まとめて報告する。なお、5次は6次から続く溝1条以外はピットなので、以下に説明する遺構は6次のものである。またSX01~04・06~08・10すべて現代の穴である。

SK05 調査区北側で検出した浅い土坑である。長さ1.66m、幅1.41m、深さ20cmを測る。遺物はほとんどない。新しい時代の可能性が高い。

SD09 (5次調査 SD01) 台地の線に沿って南北に伸びる溝で、5次から6次調査に統合して検出した。5次調査では基礎等の関係上、全掘できずにトレンチ調査とした。幅1.65m、断面形はV字形に近く、深さ110cmを測る。台地落ち際にあり、あるいは4次調査の大溝と関連するものかもしれない。戦国期の遺物が浅コンテナ1箱出土した。

出土遺物 8は割花文青磁碗で、口径11.5cmを測る。釉調は淡緑色である。9は白磁碗の口縁部である。10は土師器皿で、口径7cm、器高1.85cmを測る。上層出土。11は白磁碗の口縁部である。12は瓦質土器の口縁部。破片の下部に煤が付着している。13は土師質土器鉢の口縁部。14は土師器坏で、底径6.2cmを測る。色を呈す。外面に雜な蓮弁を施す。16は明染付で、底径5cmを測る。淡水色の地に紺色の呉須を用いる。19は土師質の鉢。口径27.4cm、器高12.8cmを測る。外面の全面に煤が付着している。20は土師質のすり鉢。口径29.2cm、器高13.3cmを測る。条線は4本である。21は土師質の鉢で、二次焼成を受けている。口径32cmを測る。22は土師質のすり鉢。底径12.5cmを測る。

SD11 調査区北東隅のSD09西側で検出した。SD09に並行して走るが、6次調査区では検出していない。幅約40cmを測る。断面形は台形で、深さ約40cmを測る。

出土遺物 17は土師質の盤で、口径20cm、器高2cmを測る。

ピット出土遺物 15・18はともにピット111出土で、15は明の染付で、口径約9.9cm、器高2.6cmを測る。18は1/2個体遺存の弥生土器鉢で、口径約19.5cm、器高11.8cmを測る。全面ナデ。

5.まとめ

これまでに行われた田島A遺跡の調査は、弥生・古墳時代を中心とする遺構群であったが、今回は戦国期の遺構を検出した。台地の周囲を巡ると考えられる溝、弧を描く大きな濠を検出した。市内の他の戦国期の遺跡と比較すれば、館の存在を強く暗示させる。今回はごく部分的な検出であったが、遺構の中心があると考えられる南東側の調査に期待したい。

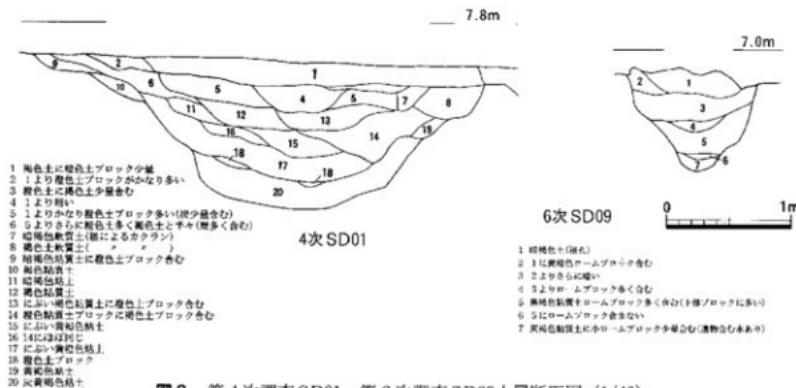


図3 第4次調査SD01・第6次調査SD09七層断面図(1/40)

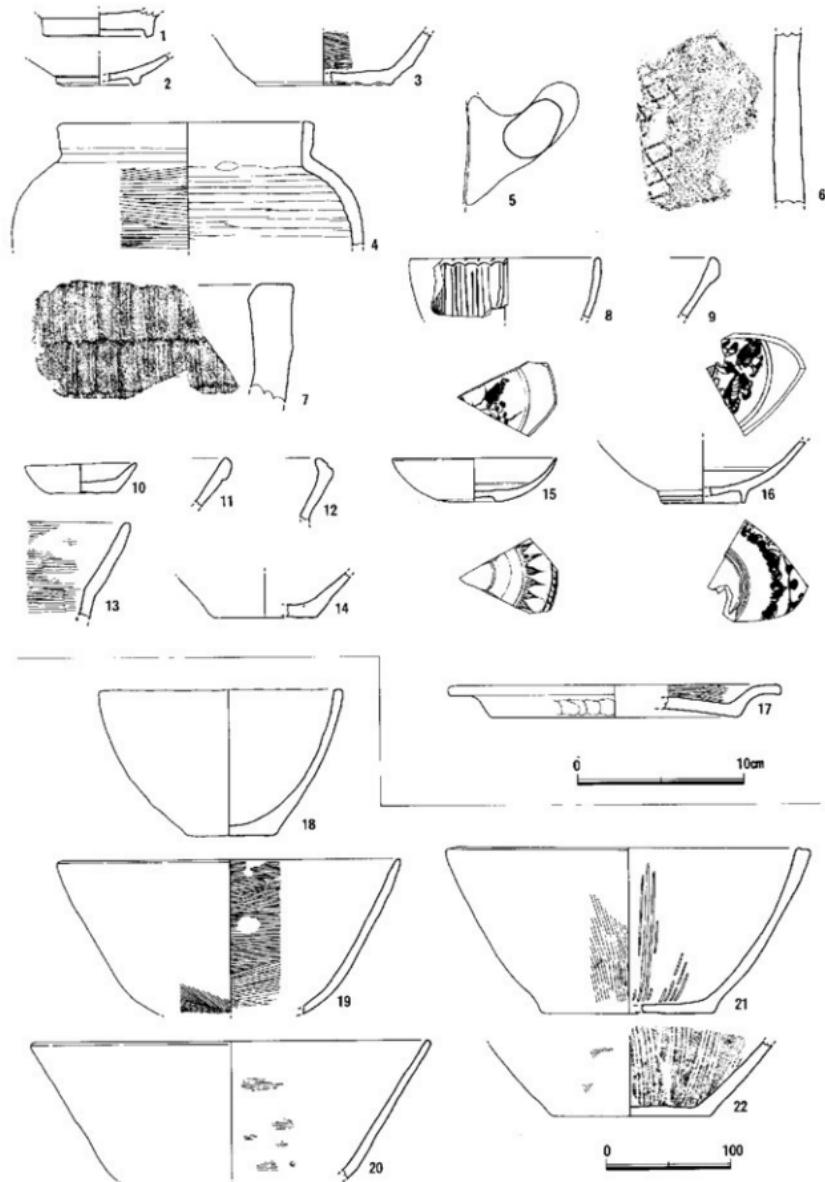


図4 第4・5・6次調査出土遺物実測図 (1 / 3 + 1 / 4)



第4次調査全景（北西から）



第4次調査全景 SD01 土層断面図



第5次調査全景（東から）



第5次調査 SD01（南から）

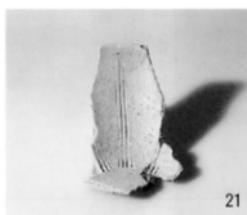
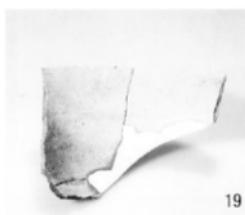
図版2



第6次調査全景（南から）



第6次調査SK05



第4～6次調査出土遺物

田島 A 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第723集

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 田堀印刷有限会社
